The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ヘーゲル反省理論の研究 : イエナ期を中心に
Author(s)	前崎, 一幸
Citation	カンティアーナ. 1992, 23, p. 87-89
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66710
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ヘーゲル反省理論の研究
――イエナ期を中心に――

前崎一幸

ヘーゲルのイエナ時代（一八〇一～一八〇七）はフィヒテとシェリングとの影響のもとに彼らの問題意識を受容しつつそれを克服することで自己の哲学を築きあげていく過程とみなされる。ところがその結果であるはずの『精神現象学』および『大論理学』などを考察するとき我々はヘーゲルが途方もない場所にいることを実感せずにはいられない。そこでそこにいたることになった論理が果たして整合的に理解されるのか、少なくとも彼の論理がどのように編み出されたのかが問題となる。この論考では、まだしも我々がヘーゲルの論理に追従できるイエナ前期から精神現象学が執筆される七年間を、前期／中期／後期と細分化し、そのなかで特に「反省」の見地からその過程を再構成することが試みられる。そこでは悟性の論理が主観―客観構造の枠組みのなかで相対化と懐疑とを経験すること、さらにその克服を「関係 Beziehung, Verhältnis」概念に基づいた「絶対的反省」の構想のもとに打開する試みが考察される。

『差異論文』『懐疑主義論文』『信仰と知』に代表されるイエナ初期の立場は、悟性的な反省および主観―客観的構造の内在的克服にある。まず悟性は「存在と制限の能力」であるゆえ、悟性の措定 Setzen, 規定 Bestimmen は常に非―措定、非―規定という対立するものを外部に持つことになる。これをヘーゲルはアンチノミーと名付け、その克服を悟性的反省が自己自身を否定すること（自己破壊）で遂行し得るものと考えた。悟性の立てる命題（A）は他の対立する命題（―A）との関係において存在するものであり抽象的な命題ゆえアンチノミーが生じ相対化される、ところがアンチノミーこそが悟性が理性に導かれるための道標であり「知と真理の最高の形式的表現」とされる。ヘーゲルにとってはAと―Aとが「関係づけられている」ことが根源的と考えられたからである。こうして主観的な反省自体が「作用」として「絶対的なものへの関係」を持つことが指摘される。さらにもうひとつ悟性的反省のアポリアを形成するとともにその解決を示唆するのは懐疑主義の形態である。ヘーゲルは古代の懐疑主義に範を仰ぐことでこの思想の重要性を示す。特に「五つのトロポス」と命名される、差異・無限進行・関係・前提・相互性（循環性）のアポリアはそのまま悟性のアポリアとみなされる。ここでは懐疑が自己否定の思想として徹底化されたあげく、自立的なものを相対化し「関

係」のなかで事象を捉える方法が具体化されてくる。以上のような初期の立場からうかがわれることはヘーゲルが悟性的反省の批判とその克服が正当であると評価する以上に事態の相対化と懐疑を先端に描出したということ、このことが注目される。

こうして悟性としての反省概念の明確化とともにその難点も指摘され、また解決のための「関係」概念への言及も行なわれた。以後この指針より論理学という名のもとに反省概念が新たな展開を見せることになる。1801／02の論理学・形而上学講義においては前者は後者への導入部として、カテゴリーを「その有限性に基づいて」叙述することから始まる。それは1804／05の講義いわゆる「イェナ論理学」において厳密かつ複雑に考察される。以下では先の主観的悟性的反省が関係（「単純な関係 einfache Beziehung」）として捉え直され、それが存在のカテゴリーから思惟のカテゴリーを経て行く過程のなかで「無限性」概念およびその発展形態と考えられる「関係 Verhältnis」（差当り相関関係と訳す）概念が見出されていく。そしてそのとき反省は「絶対的反省」として扱われることになる。まず単純な関係は、質／量／定量として検討される。「質」において、或る規定態（性）はライプニッツ的モナドとして、それ自身孤立したものとして存在し、自らに対立するものに対してはそれを無とみなす段階である。それは「全く対自的に自己自身への関係」なのである。これが意味することはフィヒテ、シェリングのそれぞれ主観主義、客観主義を「質」に位置付け、さらに発展させるべき一段階として捉えていることである。つまり悟性的反省と絶対的反省の連続性が示唆される。「量」は「一度反対のものに出ていって、再び自己自身となったもの」であり、他者の排除を媒介に自己に関係するというものである。これは「自己自身への否定的関係」と呼ばれる。さらに「定量」は他者を排除しながら「自らが排除するものを自己と同一視する」。これは自分の中に自己の同一性と、自己に内在した他者の非同一性をもつという「絶対的対立」＝「無限性」として現われることを意味する。こうして「単純な関係が自己の本質において自己矛盾することが、その関係の自己自身への反省、無限性（真無限）として措定される」。いずれにしても規定態が「規定されたもの」であることで、対立のひとつの項は対自的に存在するのではなく、「自らに対立するもののうちにおいてのみ」存在することが指摘された。しかしながら無限性という概念が設定されたからといってこれが何も超越的概念を表すというわけではなく、ここではまだ単に充足されていない概念にすぎず、それゆえ概念の充足化が図られねばならない。「無限性において真に提示されていることは、それが空虚なものであるということ」なのだ。

こうして単純な関係は無限性を経て相関関係の側面から考察されることになる。ひとつの規定態の「多様な関係は、多様なものの関係となる」。そして単純な関係としてのひとつの規定態は、ひとつの項として、それぞれ互いに分離しておかれてい

る状態、すなわち相関関係となる。ところで相関関係は、存在の関係と思惟の関係に区分されるが、ここでは前者のみ（実体と属性、因果性、相互作用）を対象とする。これらにおいて獲得される事柄は、それぞれの項（規定態）の基盤である「純粋存在」を相関関係の視点から捉えようとするとき、いずれにしても行き詰まってしまうこと、また実体属性関係は因果性を経て相互作用へと進まざるをえず、その結果さらに新たな問題を抱えるということである。なぜなら実体属性関係においては、規定態は他者を単なる属性としてみなすことを断念せねばならず、因果性関係においては、自己を原因として措定すると同時に他の原因の外化として取り扱われ、相互作用においては、無限性で或る規定態は無差別なものとして区別を廃棄され「麻痺させられる paralytisch」からである。したがってこの麻痺した関係において思惟の関係が求められる、すなわち実体性に主体の契機が導入されることになる。

以上のように、理性＝関係の観点から「或るもの」を検討するとき、反省する主体から独立した理論的な操作のなかに、個別性の主体的な行為（意識を含む）が実践的領域において働かねばならないことが指摘されることになる。このことは精神現象学への橋渡しを可能とするものでもある。「実在哲学」においても意識が「概念の絶対的空虚さとしての自己自身への絶対的反省」となることで「理論的な過程は、実践的過程に移行する」ことが言及されている。

こうしてみると『精神現象学』が、先述の単純な関係、無限性、相関関係とパラレルに叙述されていること、さらに「序文」における精神の自己内反省の究極の在り方として主張されていることが明瞭となる。意識のそれぞれの形態（ここでは、感覚的確信、知覚、悟性）は、対象意識として独立したものとして理論的に構築していこうとするのに対し、対象を認識作用から区別した認識の仕方にはかならず意識が関与しているという事実によって、単純な関係は他者としての意識の介在を意味する無限性概念へと移行する。しかし自己意識が無限性であると主張したところでそれは単なる概念にすぎず実在化される必要がある。無限性概念は実践的領域において展開し成就させねばならないとされるのである。